実写ドラマ（学園忍者もの）　３０分

風魔の小次郎

第一話　「小次郎見参！の巻」

脚本　大岡俊彦

原作　車田正美　「風魔の小次郎」
（集英社）

登場人物

小次郎（１６）	風魔忍者。
北条姫子（１６）	白凰学院総長代理。
柳生蘭子（１７）	白凰学院武道指南役。
飛鳥武蔵（１７）	誠士館。傭兵忍者。
壬生攻介（１７）	誠士館。夜叉一族。
夜叉姫（１８）	誠士館。夜叉一族の頭領。
執事（７０）	姫子の執事。
ミキ（１６）	姫子の友人。
トモ（１６）	姫子の友人。
部下（１８）	蘭子の部下。白凰学院応援団。
チンピラＡ	誠士館。
チンピラＢ	誠士館。
チンピラＣ	誠士館。夜叉の下忍。
敵Ａ	夜叉の下忍。女装して潜入。
敵Ｂ	夜叉の下忍。女装して潜入。
敵Ｃ	夜叉の下忍。女装して潜入。
魔矢（１７）	夜叉の下忍。赤星の矢を射る。
小桃（７）	風魔の里の案内役。
北条氏（享年８０）	（写真のみ）白凰の前総長。姫子の祖父。

（ラスト一瞬のみ）
夜叉八将軍・陽炎　（１８）
夜叉八将軍・紫炎　（１７）
夜叉八将軍・白虎　（１６）
夜叉八将軍・黒獅子（１７）
夜叉八将軍・闇鬼　（１７）
夜叉八将軍・雷電　（１７）
夜叉八将軍・妖水　（１６）
夜叉八将軍・不知火（１６）

（ＯＰ・ＥＤのみ）
風魔一族・竜魔（１８）
風魔一族・劉鵬（１８）
風魔一族・項羽（１７）
風魔一族・霧風（１７）
風魔一族・麗羅（１５）
風魔一族・兜丸（１７）
風魔一族・琳彪（１７）
風魔一族・小龍（１７）

○不動岳山中、けわしい山道

部　下「うわッ！」
　　けわしい道に足をとられる部下。

タイトル『中央アルプス・不動岳――――』
　　キャンプの荷物を背負っている。もう何日も山中をさまよったよう。柳生蘭子（１７）、手を貸す。

部　下「ホントにこんな所に人が住んでいるんですか？」

蘭　子「人じゃない。忍びさ。…風魔の忍びの一族を連れて帰るまでは、この柳生蘭子ともども生きて白凰学院には帰れないと覚悟しな」

部　下「しかし…」
　　と言いかけて、小桃（７）が走ってくるのを見る。

小　桃「あんちゃん、こっちこっちー（道の向こうを指さす）」
　　大人も歩くのが困難なけわしい道を、蘭子たち二人を追いこして身軽に走ってゆく。

部　下「なんだあの子供…？」

小次郎「どこだどこだそいつはァァァァ！」
　　木刀を片手に、小次郎（１６）が走ってくる。

部　下「う！（剣幕にびびる）」

小次郎「どこだどこだどこだ！」
　　ドップラー効果でどんどん音が高くなってくる（Ｆ１のように）。通り過ぎた瞬間、急に音が低くなる。

小次郎「どこだどこだどこだ…」
　　一瞬のうちに二人のそばをかけぬけていく小次郎。突風が巻き起こる。

蘭　子「！！（ふり帰る）……風？！……」
　　思わず後を追う蘭子。

部　下「ちょっと！　蘭子さま！」

○同、林の中

小次郎「こいつか小桃を襲ったのはァ！」

巨大なスズメバチの巣(２ｍ)を木刀で叩き落す。
中から何百匹ものスズメバチが戦闘体勢に！　おいついた蘭子、部下。

部　下「うわあッ（顔を覆う）」

蘭　子「ちいっ！（ムチを取り出す）」

小次郎「ヒュウーーーーッ（不敵な笑み）」
すさまじい木刀さばきで、スズメバチを叩き落していく！

小次郎「１！　２！　３！　４！　５、６、７！　ハチ！　なんちゃって！」

蘭　子「なにい！？」
更に加速した動きで、雲霞のごときスズメバチを叩き落す。

小　桃「（急に大人びて、蘭子に）お待ちしておりました。白凰学院、武道指南役の柳生蘭子さま。我々が風魔一族です」

蘭　子「まさか、あの男が…！」

小　桃「すいません、風魔の里の掃除が間に合いませんで…。（子供に戻り、小次郎に）やっちゃえ！小次郎あんちゃん！」

小次郎「８８６！　８８７！　８８８匹目はオマエかボス猿！」
最後の一匹は女王蜂。８８７匹のつぶれたスズメバチ。強い風が吹く。

蘭　子「小次郎。…風魔の小次郎か！」
音楽スタート。
襲いくる女王蜂。叩き斬る小次郎のアップ。

タイトル　「風魔の小次郎」

○オープニング

音楽（主題歌の前奏）つづけて。
赤い月と荒野。走る小次郎。

ＮＡ　『その脚力は一日数千里を走り　その耳は三里先におちた針の音さえもききわけ　闇夜でも千メートル先の敵を見きわめる目をもち　動けば電光石火　とどまれば樹木の

ごとし　されど人知れず風のようにさすらい　風のように生きてきた…　それが風魔だ！！』

「風」の旗の下に集う風魔一族。（小次郎、竜魔、劉鵬、項羽、霧風、麗羅、兜丸、琳彪、小龍）

主題歌はじまる。

白凰学院、姫子、蘭子。誠士館、武蔵、壬生、夜叉一族。序盤の名場面など。

キメの場面は、飛鳥武蔵、壬生攻介＋夜叉八将軍と、小次郎＋風魔八忍、計１９人のフルショット。

●　ＣＭ

○タイトル　「第一話　小次郎見参！の巻」

○白凰学院

○同、総長室

執事（７０）から報告を受ける、北条姫子（１６）。

姫　子「そうですか。また一回戦敗退ですか」

執　事「はい。エースの船田さえいればこんなことには…」

姫　子「また、不慮の交通事故ですか？」

執　事「はい。これで連続７件。ことごとく我が校のスポーツ部のエースばかり。謎の交通事故で選手生命をうばわれ、いまだ犯人は特定できていません」

×　×　×

それぞれの交通事故の場面。

×　×　×

姫　子「生徒たちの動揺はおさまりましか？」

窓の外を見る姫子。生徒たちが楽しそうに行き交う。スポーツバッグを持った車椅子の生徒。

執　事「表面的には…しかしどうでしょう。誠士館高校の金を使った引き抜きは露骨になっています。交通事故にあった

のは、それを断わった者たちばかり」

姫　子「…」

総長席の後ろには、巨大な遺影。北条氏。

執　事「心中お察しします。大旦那様さえ生きていらっしゃれば…」

姫　子「死んだおじい様のことを言っても仕様がないじゃない…それとも私の総長代理としての能力が低いとでも！？」

執　事「…」

姫　子「たしかに、現役高校生が学校経営なんて、そもそも無理なのかも。おじい様の遺志を継ぐなんて」

棚の中には、輝かしい優勝杯の数々。しかしここ三年分が空白。

姫　子「さきほど役員会から、一学年２クラスから１クラスへの統合案を受け取りました。このままでは来年の入学志願者が大きく定員割れだとも」

○同、校庭

姫子、落ち込んだまま下校。ミキ（１６）、トモ（１６）が声をかける。

ミ　キ「姫子―！　これから渋谷行くけどいく？」

ト　モ「合コンに発展するかもだけど、ムリならこないだ言ってたサンダルの新作買いにいこって話しなんだけど」

姫　子「うん…ちょっと今日は気分じゃないゴメン」

ミ　キ「なんだよ最近暗いよ？総長さま」

姫　子「ミキって高等部からこの学院だっけ？」

ミ　キ「そだよ？　姫子は初等部からだよね？」

姫　子「この学校がなくなるかも知れないとしたらどう思う？」

ミ　キ「うーん、困るけど、いんじゃない？　卒業さえ出来れば どっちでもいいよ私的には。でも姫子は困るでしょ」

ト　モ「（遠くから）どーすんの？　いくの？」

ミ　キ「あ、じゃいくわ」

姫　子「うん。また誘って。ゴメン」

ミ　キ「学校よりも目の前の恋、どうにかしないとなのよ私。

姫子も女の子なんだからさあ（バイバイ）」
姫　子「私だって恋くらいしたいよ（バイバイ）」
校庭を眺める姫子。下校する生徒、クラブ活動。
姫　子「服買いにいったり、甘いもの食べたり、私だってそんな女子高生だったかも知れない。けど…」
突然、さっきの二人の悲鳴が！
ミ　キ「キャー！」
ト　モ「ちょっと、何すんのよ！」

○同、校門

かけつける姫子。チンピラA、B、C（誠士館の制服）がミキの腕をねじりあげている。
ミ　キ「だからお前にやる金はないっつってんだろ！」
チンピラA「ねえんならどっか連れてくけどいいか？」
チンピラB「とりあえずウチの高校まで来なよ？　誠士館ってのはイケメンぞろいで有名だぜ」
ト　モ「人を呼ぶよ！」
姫　子「お待ちなさい！　（誠士館の校章を見て）誠士館の方たちですね！　この名門白凰学院の正門で、このような乱暴狼藉は許しません！」
チンピラA「名門が聞いてあきれるぜ！　ずいぶん生徒がウチに転校してきてるみたいだけど？」
チンピラB「しそびれたやつは車椅子らしいがな！（笑）」
姫　子「それは…あなた方誠士館が」
チンピラC「おや、よく見れば総長代理の北条姫子さんじゃないですか？」
姫子の腕を取り、ねじりあげる。
姫　子「痛ッ！」
ト　モ「姫子！」
姫　子「なにをするつもりですか！？」
チンピラC「こいつさらったら金になるかな」
ミ　キ「誰か！　誰か来て！」
チンピラC「騒ぐとこの女の肩外すぞ」

姫　子「この…痛！…」
そこへ、一陣の風が吹く。風の中からあらわれる
小次郎、蘭子。
小次郎「オイ蘭子とやら、ここは白凰か誠士館かどっちなんだ？」
蘭　子「もちろん我が母校白凰学院さ。しかし私のいない間にこ
こまで荒れているとは…」
ムチを出す蘭子。チンピラＡを一撃。ミキ、解放。
姫　子「蘭子さん！」
蘭　子「柳生蘭子、只今戻りました」
姫子を捕らえているチンピラＣをムチでうつ。が、
Ｃは木刀で受ける。
蘭　子「むっ」
姫　子「それではその方が風魔の…」
小次郎「はうあ！」
姫子のキラキラした瞳に、小次郎目がハート。
小次郎「メ…メルヘンだなあ～ッ」
チンピラＡ「いてェなこのブス！」
蘭子を襲うＡ、Ｂ。蘭子のムチは一瞬でＡ、Ｂを
倒す。蘭子がＣに向かうのを、小次郎が制する。
蘭　子「なに邪魔してんだよ小次郎！」
小次郎「あのメルヘンちゃんは誰？」
蘭　子「白凰の総長代理、北条姫子さまだよっ！」
小次郎「そうか…姫子さま…」
いきなりダッシュ、気づいたらＣの後ろにいる。
はじけ割れるＣの木刀。
チンピラＣ「なに？」
小次郎「フッ…なにハトが豆鉄砲くらったようなツラしてやがる。
姫子さま。この小次郎が来たからには、超大丈夫ッス」
チンピラＣ「野郎！」
小次郎「おせェ！」
木刀できりかかる小次郎。だがＣは宙に飛ぶ。そ
のときに、裾がはだけて、裏地の夜叉の面が見え
る。小次郎も宙に飛ぶ。空中で二、三合ののち、
Ｃ、倒される。

小次郎「オイチンピラ！　次は一番つええ奴を連れて来い！　（木の上に向かって言う）いいか！一番ケンカのつええ奴だぞ！」

その木の上に潜む男、飛鳥武蔵（１７）。長刀を入れた袋を持ったまま。

武　蔵「…」

消える。チンピラ達もほうほうの体で去ってゆく。

○同、総長室、夕方

姫　子「ホントにありがとうございました。風魔の…」

蘭　子「小次郎」

姫　子「小次郎さん」

小次郎「あ、いや、さんづけはイイッス。小次郎で」

姫　子「小次郎」

小次郎「姫子ちゃん」

小次郎の頭をムチの硬い所で殴る蘭子。

小次郎「ってえな！なにすんだよドブス！」

蘭　子「姫子さまを軽々しく呼ぶな」

小次郎「いいじゃん、ねえー姫子ちゃん」

姫　子「はい小次郎。その方が親しみがもてます」

蘭　子「とにかく！（ムチで床をピシャリ）　誠士館の汚いやり口はウチの正門で堂々と狼藉を働くまでになった！」

姫　子「私の育ったこの学院を、なんとか救う方法はないのでしょうか。亡くなった私の祖父が、なにかあったときは風魔の一族を頼れと言っていました。そこで小次郎に助けていただきたく…」

小次郎「モチのロン助！あいつらをバッタバッタとなぎ倒して」

蘭子、またも小次郎の頭を殴る。

蘭　子「ケンカさせに来たんじゃないよ！　ウチはスポーツの名門校だ。次のサッカー部の試合に、まずは助っ人として参加してもらい、関東大会進出を決めたいのだ」

小次郎「ええー！サッカーやんの？　あいつらブッ飛ばしゃいいじゃん！　（また殴られる）ってッ！」

蘭　子「バカ野郎！　忍びが目立ってどうすんだ！」
姫　子「小次郎。どうか、人前で忍びの技を見せるのはやめて下さい。生徒がびっくりします。できれば風魔の存在は」
小次郎「ハイわかりました！　オイラは忍びです！　人目につかず、姫を秘密裏に成功に導くのが忍者の仕事であります！」
蘭　子「最初っからそう言えばいいんだよ。ところで小次郎、確認してなかったが、変装の方は大丈夫か」
小次郎「一応忍びだからね。なんで？」
蘭　子「サッカー部といっても女子サッカー部だから」
小次郎「な、なでしこ！？」
窓の外の、女子サッカー部。
小次郎「えーと、じゃ、女装が必？」
蘭　子「くれぐれも、目立たぬように」
目が泳いでいる小次郎。

○誠士館、夜、雷鳴が轟く

○同、総長室

壁にかかる関東勢力図と巨大な夜叉の面。
おびえるチンピラ三人の前で、ひとりチェスをする夜叉姫（１７）。
夜叉姫「それで…？　北条姫子をさらい損ねたと」
柱の影から現れる武蔵。
武　蔵「申し訳ありません夜叉姫…。おそれながら…我らが思うほど早く、白凰学院は落ちないかも知れません」
夜叉姫「なぜ？　関東１７地区全て我らの制圧下、もうすぐ関東一円は我ら誠士館の手中というのに」
武　蔵「風の一族が来ました」
夜叉姫「（チェスの手を止める）バカな…風魔の一族だと？　気は確かか？」
武　蔵「私もこの目で見るまで信じなかったでしょう。あれは忍びの技です。名を風魔の小次郎と。忍びを秘かに使って

いるのは、誠士館だけではなくなった、ということです」
夜叉姫「風魔…我ら夜叉一族の宿敵が、この地に現れただと…？」
武　蔵「ことによると、八将軍の召集が必要かと」
夜叉姫「バカな！　夜叉八将軍だと！？　…壬生！　壬生攻介はおるか！」
壬生（１６）、影から現れる。
壬　生「ここに」
夜叉姫「今一度この飛鳥武蔵とともに風魔を探れ！」
壬　生「御意。…武蔵よ、八将軍とはまた気が早いものよ。オレの剣でこと足りるだろう」
武　蔵「お前も見れば分るさ。風魔一族が、我々夜叉と同じく、現代に生き延びていた事をな」

○翌日、サッカー場

看板　『全国高校女子サッカー選手権地方予選　白凰学院　対　誠士館』
ざわざわする試合前の会場。

○同、控え室

ユニホーム姿の姫子、小次郎にあいさつ。
姫　子「それではよろしくお願いします。最初の小次郎の助っ人が私の部で嬉しいです。ではあとで」
小次郎「大船に乗った気持ちでいろよ！」
ドア閉まり、蘭子と小次郎二人になる（この時点では小次郎はまだバックショット）。
蘭　子「プッ…くくく」
小次郎「なんだよ！なにが面白いんだよ！」
ふりむいた小次郎、女装姿。
蘭　子「だって…アハハハハ！ひー、苦しい」
小次郎「ちっきしょう！　伝説の風魔一族が女装して球蹴りって…冗談じゃないわよ！」
蘭　子「（笑いをこらえて）そのわりにはやる気満々じゃねえか」

小次郎「あたぼうよ！　まさかオレの姫さまがサッカー部のレギュラーとは…さすが姫！　彼女にアシスト。そして恋のアシスト…！」
蘭　子「バカ野郎！　姫子さまに手ェ出したらタダじゃすまないからね！」
小次郎「あー、おっかねおっかね」

○同、ピッチ

誠士館女子チームはアップ中。ピッチ脇に蘭子。
蘭　子「しかし小次郎のヤツ…校内で既にド派手な事やっておいて、今回だけ目立たずに助っ人なんてできるのかね？」
入ってくる白凰チーム。はしゃいで観客に女の子風に手を振る小次郎（女装）。
蘭　子「不安だ…」

相手チーム。三人、女装してるのがいる。
敵Ａ　「フフフ…」
敵Ｂ　「おっと、その紋章、隠しておけ」
左腕の夜叉の面の入れ墨をリストバンドで隠す三人。
敵Ｃ　「風魔の小次郎…。その実力、試させてもらおう」

●　ＣＭ

○サッカー場、ピッチ脇

靴ひもを直す振りをして、小次郎が蘭子に小声で。
小次郎「蘭子さんよォ。…俺と同類の奴らが、向こうにもいるぜ」
蘭　子「なに？」
小次郎「忍び…校門で会った奴ら、夜叉の紋章をしていた。おそらく、夜叉一族」
×　　×　　×
校門でのバトル。裾から見えた夜叉の紋章。

×　　×　　×

小次郎「夜叉一族が誠士館についてるとなれば、謎の交通事故も忍びのやり口ってことになるな」

×　　×　　×

交通事故。逃げる夜叉一族。

×　　×　　×

蘭　子「まさか、誠士館も忍びを」

小次郎「そいつらが、今相手チームにも混ざっている。オイラと同じ、助っ人ってとこだ」

蘭　子「そうか、相手も忍びを…。話は分かったが、小次郎」

小次郎「なんだ？」

蘭　子「女装で言うな」

小次郎「（顔をあげて）うるせえ！」

○同、ピッチ

ホイッスルでキックオフ。姫子と小次郎（女装）、長年のコンビのようにボールを回し、試合を有利にすすめていく。

姫　子「小次郎、すごいわ！」

小次郎「いやいやいや…こんなコトも出来ますよ！」

スゴイスピードでリフティング。人間業ではない。

蘭　子「あのバカ…！」

姫　子「すごいすごいすごい！」

蘭　子「バカ！試合中だ！」

敵ＡＢＣ、殺人スライディング。小次郎、足を削られる。フリーキック。姫子が蹴る。

小次郎「いてェなこの野郎！」

敵Ａ　「なんだ、風魔はこれしきもかわせんのか？」

小次郎「夜叉だな！」

敵Ａ　「ほう、察しがいいな」

小次郎「だって俺より女装が下手だ」

姫子のパスが小次郎に。敵Ａ、股間に蹴り。小次郎、ボールをはさんだまま飛ぶ。小次郎消える。

ボール、そのままなぜか宙に浮いている。

姫　子「え？…え？」

忍びたちが超ハイスピードで闘っているため、常人には見えない。ちゃっかり小次郎は毎回ボールをタッチして宙に浮かせているのだ。

それを観客席の裏から見ている武蔵と壬生。

武　蔵「あいつら…やりすぎだ」

壬　生「だが風魔の身体能力は分るではないか」

武　蔵「夜叉の下忍三人を相手に、息切れひとつせず、か…」

素手バトル。

結局、三人を蹴りでぶっとばし、ボールも蹴る。

そのボールは三人に次々に当り、そのままゴールネットへ。ウオーッと沸く観客。超喜ぶ姫子。

蘭　子「…（頭を抱える）」

○同、ベンチ

小次郎、ユニホームを脱がされている。女装も元に。

小次郎「なんでだよ！　得点入れたじゃんかよ！　夜叉の奴らも病院行きだぜ？」

蘭　子「め、だ、つ、な、とあれほど言っただろうが！　貴様それでも忍びか！」

小次郎「ちぇっ…分りやした。こういうコトかい？」

小石を拾って、矢のように投げる。ピッチのボールに当り、軌道が変わる。相手チームのパスが味方に届く。とまどう相手。ラッキーと味方。

蘭　子「そんな事も出来るのか」

小次郎「とりあえず夜叉の雑魚は倒したからよ、あとはサッカーの実力同士だと思ったんだよ」

蘭　子「…」

小次郎「あ！　姫子、あぶない！」

チャージされてボールを奪われた姫子。しかし、小次郎が石つぶてを投げ、ボールを倒れた姫子の

元へ。姫子、ボールをキープし直し、シュート。
小次郎「いけえっ！　…なにっ？」
ボールの軌道が不自然に曲って外れた。
蘭　子「小次郎！　今の…」
小次郎「ああ！　向こうにもまだいるようだぜ…俺と同じ技を使う忍びがよ！」
たくさん小石を拾う小次郎。ゴール前、クロスボールが高く浮く。しかし軌道が変えられる。
小次郎、石を投げて元の軌道へ。また変えられる。
また戻す。小次郎、石を全部たてつづけに投げる。
ボールは次々に移動。
小次郎「キリがねえ！蘭子、ちょっといってくる！」
木刀を構える小次郎。
蘭　子「どこへ！？」
小次郎「石つぶての主を倒しにさ！」

○試合場の裏、地下駐車場

壬生と武蔵が待ち受けている。
小次郎、木刀をたずさえてやってくる。
壬　生「なかなか面白い趣向だったよ。手裏剣の腕は夜叉の中でも私はかなりのランクなのだが…」
小次郎「邪魔してたのはオメエか！　名のれ！」
壬　生「夜叉一族、壬生攻介」
小次郎「風魔の小次郎だ！　（武蔵に）オイ、こいつが一番ケンカのつええ奴なんだろうな？木の上にいた奴？」
武　蔵「そうだ風魔の小次郎とやら。夜叉の斬り込み隊長とは彼の事よ」
小次郎「よオし！　やるぜ夜叉！」
壬　生「五百年の時を超えて、再び風魔一族と夜叉一族が闘いをはじめるとはな…ゆくぞ風魔！」
壬生 vs 小次郎の木刀バトル。
×　×　×
サッカーの試合進行をカットバックしながら。

必死に闘うチームメイト。姫子。

×　　×　　×

壬　生「ゆくぞ！　霧氷剣！」

小次郎「うおッ！？」

壬生の剣からブリザードが。

間一髪、小次郎かわす。背後の壁が凍っている。

次々とくり出される吹雪。小次郎はかわすのが精一杯。壬生、天井のスプリンクラーを木刀で壊す。おびただしい量のシャワー。後ろから木刀を振る壬生。水が一瞬で凍り、氷塊となって飛んでくる。小次郎、からくも叩き割る。次々に飛んでくる氷塊、割っていく小次郎。はじいた氷塊が駐車してある車のフロントガラスを割る。

壬　生「どうした？終わりか！」

小次郎、構える。

武　蔵「（気配を感じ）いかん壬生！　踏込むな！」

小次郎「風魔烈風！」

小次郎のひと振りが突風を巻き起こす。スプリンクラーシャワーがふきとばされ、壬生もふきとばされかけ、よろめく。その隙に踏込んだ小次郎の一撃！　蘭子、乱入。

蘭　子「小次郎！　（武蔵に気づき）誠士館！やはり貴様ら！」

武　蔵「おっと、もうすぐ試合が終わるぞ。人が来る」

壬生を背負い、立ち去ろうとする武蔵。

武　蔵「オレの名は誠士館の飛鳥武蔵。白凰学院を潰すのが仕事だ。勝負は預けたぞ、風魔の小次郎」

小次郎と武蔵、視線を交しあう。

○サッカー場、ピッチ

試合終了のホイッスル。白凰２―０で勝利。

姫　子「やった！　蘭子さん！小次郎！　勝ったのよ！　白凰が勝ったの！」

小次郎「フッ…姫子さんの実力さ」

姫　子「ありがとう小次郎！（手を握る）」
小次郎「ズッキューーーーーン！　えへ…えへへ…ハッ！（蘭子の殺意の視線を感じて、キリッとなる）これから風魔が白凰学院を助けます。名門白凰の再興の、今日が第一歩なのです」
姫　子「ハイ！（抱きつく）」
小次郎「メ…メルヘンだなァ～ッ」

○同、シャワー室

姫子、チームメイトがシャワー。

○その外

湯煙が少し開いた窓から出ている。
小次郎「オレのメルヘンが…オレのメルヘンがあの湯煙の奥の奥に…抜き足、差し足、これがホンモノの忍び足…（スゴイステップを見せる）」
と、またもや背後に殺気。蘭子がムチをスタンバイ。
蘭　子「なにがメルヘンだアッ！」
ムチをひとふり、小次郎の両足を絡め、木に吊るしてしまう。蘭子、去ってゆく。
小次郎「ちょっと！タンマ！　ゴメン！オレが悪かったです！蘭子さん！ねえ、蘭子さんってば！蘭子さんっ！」

○誠士館、校庭、夜

摩矢が赤星の矢を射る。それを見つめる武蔵。
各地の夜叉八将軍、陽炎、紫炎、白虎、黒獅子、闇鬼、雷電、妖水、不知火がそれに気づく。
ＮＡ　『その夜、赤星の矢が放たれた。各地に散る夜叉八将軍集結の合図である』

○サッカー場、シャワー室の外、夜

逆さ吊りの小次郎。夜空に赤星の矢。

小次郎「朝まで放置ですかね…トホホ」

『つづく』

●　ＣＭ

○エンディング

ハードなオープニングとは対照的に、おだやかなもの。風魔の里とか、オフ的なものを。

○次回予告（次回活躍するキャラがナレーターをする）

小次郎『姫子さまの学園を、そうと知れず守るのが忍びの仕事。ってもなあ、蘭子はウゼェし、なかなか難しいぜ。でも姫さまの為にマッハで走るぜ！　病院の窓からずっとこっちを見ている子…気になる。次回風魔の小次郎「ちいさな友達」に御期待下さい！』